

## 80年代の小説にみる中国社会の問題点 その三

堀 黎 美

### Reflex of the Chinese Social Problems on the Contemporary Chinese Literature Part 3

Reimi Hori

Recently in China, it is often the case that more and more people envy others for their ability or success: such trend is called “Hong yan bing” in Chinese, literally meaning “red eye disease”.

#### 紅 眼 病

今回はここ数年来中国で流行をきわめているといわれる紅眼病をとりあげてみたい。

紅眼病の病原菌は有史以来存在し続けてきたと思うし、中国人以外にも患者や保菌者は無数にいるはずだが、近年特に中国で流行しているのは何故か。どういう土壌に発病し、どんな症状を呈するのかを小説の中から探ってみたい。因みに紅眼病とは眼病の一種ではなく他者の才能や成功に対する嫉妬のことである。この病いはあらゆる階層、分野に蔓延しているらしいので、知識分子、労働者、農民の世界からそれぞれ選んでみた。

#### 陰 錯 陽 差

まずは蔣子龍の陰錯陽差（事が錯乱している意味）原文は約5万字。

七二七研究所の技師長布天雋はアメリカの某企業の招きで渡米し、約3週間で、ある研究課題を共同で完成し、更にその実験設備を利用し、寝食も忘れ招聘に応じた条件の一つであった中国国内ではしにくい実験をし、大量の実験結果を手にすることができた。それは中国にとって大きな収穫となるものであった。彼女は任務を終え、3年前から中国科学技術交流総局特別招聘顧問としてアメリカに派遣されていた、同じく七二七研究所の高級技師兼第三研究室の主任である夫の馬弟元とともに、多勢の友人達に見送られ帰国の途についた。3年の在米期間中出国の任務を完璧にやりとげ、国家の外貨を大量に節約し、最先進技術と設備を入手して帰国する馬弟元は自信に満ち溢れており、そんな夫に布天雋は若干の違和感を覚えている。七二七研究所では彼女はずっと夫の上役であり家庭においても妻が常に主導権を持っている夫婦だった。帰国後は夫婦

ともどももとの職に復する。その帰国は夫妻にとって勝利の凱旋のはずであったが、北京空港に出迎えていたのは彼等の一人娘で七二七研究所の研究員馬珊珊だけである。すでに帰国の時間は知らせてあるのに中国の習慣である勤務先の車の出迎えがないとなると、多くの荷物を抱えた身で何度も乗り換えが必要、かつ殺人的混雑のバスではどうしようもない。馬弟元が改めて研究所に出迎え依頼の電話をすると、あなたはすでに窓際族だから出迎える必要はないと研究所では決定している旨告げられる。

おいおい分ってきたのは3、4週間の布天隼のアメリカ出張中、研究所では指導部改造の名のもとに布天隼が目をかけていた研究室の主任達を解任し、すべてを所長兼党書記の沈瑤の腹心がとって替わったということ。その原因となったのは魏求我という記者の発表した布天隼、馬弟元の訪問記が彼等を過大にほめすぎるとして沈瑤らの反感を買ったことにあるらしい。

もともと所長兼党書記のポストは、圧倒的多数の支持を受けた布天隼が予定されていたのだが、彼女自身がそれを望まず辞退したため一研究室主任でしかなかった沈瑤がかけひきによって成り上がった経緯があり、沈瑤にとって布天隼は目の上のこぶで、所長に就任してからは自分のすべての権力を利用して布天隼の追い落としをはかる。

布天隼は貧しい少女時代を過ごしたが、天才的頭脳の持主で学生時代も就職後も一貫して周囲からぬきん出た存在だった。1957年夏、毛沢東、劉少奇、周恩来ら中央の指導者が北戴河で会議を開いていた時、卓上に突然精巧なトランジスターラジオが出現した。この中国最初のトランジスターラジオこそ布天隼の手になったもので、これにより彼女は科学技術大賞を得たのである。60年代のはじめにはすでに彼女の理論は世界でも注目され、各国から共同研究や講演依頼が相次いだ。文化大革命が開始されると夫の馬弟元は逮捕され、彼女は娘が幼かったため逮捕こそされなかったものの反動的技術権威者の烙印を押されて造反派に吊し上げられ、髪の毛を虎刈りにされるなどの仕打ちを受けた時でさえ、夜間皆が寝静まってから実験室にしのびこみ研究を続けてきたのである。彼女は名声を求める人間ではなくひたすら研究に没頭した結果が名声を呼んだにすぎない。従って彼女は実力のない人間に厳しかったし職場の規律にも厳格だった。

帰国翌日布天隼は研究所の門をくぐると所内の空気が変化し自分が孤立しているのを感じる。会う人が皆冷淡で反抗的なのは何故だろうと思いつつ所内を見回り、所員のミスを指摘したり実験員のいい加減な態度を注意している時、彼女の参加を求めるアナウンスがあり党委員会が開かれているのを知る。七二七党委5人のうち他の4人はすでに会議の大半を終え、重要な議題は決定済みとなっている。所長の沈瑤は布天隼の帰国と研究所への出勤を知らず故意に開会を知らせず、彼女の出席する前に、全国婦女連合会から3月始めに開かれる全国婦人労働模範（者）表彰大会に布天隼の参加を要請してきているのにも「彼女ばかりが出すぎる」と断わるよう指示する。彼女は会議室に来るとアメリカへ行っていた3、4週間に5回も党委員会が開かれ、幹部の若がえり、専門化の名目のもと大幅な人事移動が“満場一致”で行われたことを知り、あまりのやり方に礼儀上も自分に一言相談があつて然るべきと異議を述べるが、小数は多数に従うのが党の原則、と拒否されてしまう。“若がえり”の錦の御旗は50才余の布天隼より40をすぎたばか

りの沈璐に有利な口実である。ついで彼女は85年度の重点課題につき提案するが、それも沈璐にそんな空虚な討論をしている時間はないと席を立たれ、怒りのあまり布天雋は卒倒してしまう。

馬弟元も研究室内にすでに机もなくさまたないやがらせをされる。彼は退職を決意する。

布天雋は入院し馬弟元は自分の能力を生かせる道を探し出す。彼の表情は明るい。布天雋も多分研究所にはもう戻らないだろう。この夫婦を紹介する記事を書いた魏求我は、自分の書き方が一面的であったこと、そのため布天雋達にどんな影響が及んだかを知り、深く反省し馬珊珊に謝罪する。

布天雋が何故このような目にあうのか本文中から引用すると

“たとえば彼女が天才だとしてもそれがどうだというのだ。同僚の立場からみれば他人の天才を認めるのは決して愉快なことではない。天才は周囲の人間の心に激しい敵意を呼ばずにはいられず、嫉妬心は人類の原始的、本能的衝動である。激しい競争社会である現代においては、周囲にぬきん出た能力は同時代人の最も許しがたい罪である（p427）”という環境の中であくまで妥協を知らない彼女は全く無防備である。“この研究所内の少なくとも半分は研究者として不適格である。だから我々は国際的水準を有する成果があっても、国際的水準を有する人材は養成することができない。つまり役職、各級機構系列、矛盾、人間ばかり多く課題は多勢です。集団になれば真剣に取り組まないし個人が奮闘しても通用せず、まるで袋に詰められた蟹みたいにお前が彼の足に噛みつけば、彼はお前のはさみをくわえ、誰もが身動きできず強い力で互いに牽制しあっている。国外では各自がそれぞれの課題を持ち相互に秘密を保持し、成果をあげられなければ失脚してしまうのに（p428）”と思っている布天雋は、能力では絶対に彼女に対抗し得ない沈璐を代表とする人間からは高慢としか見られず、“我々は（彼女の）雌の威力の下で永遠に日が当たらない。仕事は皆ですするのに功績は彼女ひとりのもの。至る所に顔を出しおいしい所はひとりじめ。全国人民大会代表、十二回党代（表）会代表、全国婦女代表会代表、名誉もお金もひとりじめ”

“まったくだ。作家までが彼女を持ち上げる。女が権力を持てば国家も乱れるし民族は亡びる。職場でだって同じことさ、歴史にもいっぱい教訓があるじゃないか、呂后、武后、西太后、江青女帝……（p429）”中国は女が完全に解放されていると信じている人が日本にはまだいるようだ。一般人の本音はこんなところだと思う。それはともかくとして現在の中国では外国に行くことは最大の憧れであるから、夫婦で出国したことは周囲を相当刺激したことは想像される。布天雋が滞米中必死で実験したことの価値などには重きを置かず、日本やアメリカに行くこと即ち宝の山に足を踏み入れることと思っている人が実際に多いのは、外国人から見ると非常に不思議な現象である。

すぐれた才能の持主は周囲に紅眼病患者を発生させやすいのは中国特有とはいえないが、つぎに紹介するのは庶民同志の紅眼病がいかにか社会の空気を損なっているか、がとりわけ巧みに描かれている作品である。

## 公共汽車咏嘆調

劉心武著 約2万6千字

(他に公共的かつ大量輸送手段を持たない北京においては) 公共汽車—バス—は都会の血液である。このバスを利用せざるを得ない乗客は死ぬほどイライラさせられている。待っても待っても来ず、やっと来た車は「区間」や「快速」の札がかかっていて無情に通過してしまう。かろうじて乗りこんでも袋の中のじゃが芋なみ。バスターミナルには沢山車が停まっているのに何故運転しないのか、頭に来た乗客が配車指令室に抗議したところで誰ひとり相手にさえしてくれない。配車係は知らん顔、運転手か車掌か分からないが数人の若者が長椅子の上でおしゃべりしている。乗客が「何故発車しないのか」ともう一度更に声を張りあげると「待ってろ」「今車がないんだ」と口々に言う。とうとう1台やってきて人々が先を争って乗りこむと「西単には停まりません。西単に行く人は乗らないで下さい」と車掌が叫んでいる。(繁華街である) 西単は乗降客も多いのになぜ停車しないのか、車内はまた混乱を極めるうちにバスは発車。バス内での騒ぎは続いており数人の乗客は運転手の所まで行って西単に停車するよう要求している。もともと配車係の指令は絶対的なものでなく、運転手の裁量にまかされている部分も多い。

配車係は乗客が指令室に闖入してきて声を荒げて詰問するのにはもう馴れきっている。指令室の壁には運転手達の名札がかかっている。ラッシュ時以外は車は半分しか運転しない。その間運転手は帰宅してしまい車を出そうにも出せず、ラッシュ時になっても戻ってこない運転手もある。欠勤は配車係の関知するところではない。従って稼働できる車が酷い道路事情の中でだんだん運転にならないよう「快速」や「区間」を使って配車係としては精一杯努力しているのである。

さきほどの車は(乗客の要望を入れ) 西単に停まった。多くの乗降客にまじって降りてきた二人の青年が運転席の戸を開けるなり何故労働組合ビル前に停車しなかったのかと罵倒しはじめた。運転手に「出てこい! 降りろ!」と叫んでいる。労働組合ビル前は発車時には停車の予定だったのだが、乗客のさわぎが大きいので運転手はそこで停車せずつぎの西単で停車したからである。運転手はもともと善意で変更したのに青年達に口汚く罵倒され黙っていられず言い争いになる。野次馬が周囲をとり囲む。ついに運転手は「この車は故障したから皆降りて次の車に乗り換えて下さい」と宣言して運転をやめてしまう。事態を更に紛糾させたのが車掌の態度である。つっけんどんで横柄な口の利き方が乗客の怒りを買う。

交通係の警官がやって来たが、いざこざがすぐには解決しそうにないのを見てとって、他の車の流れを整理しはじめ、治安係は野次馬を追い払うのに懸命である。

運転手の名前は韓冬生、31才。貧しい家庭の出身で文革中に中学を卒業すると農村に送られた。79年になって父の知りあいを頼ってバス会社に就職できたので北京に戻ってこられた。2年間切

符売りをしそれから運転を習って運転手になった。はじめはこの仕事に満足していたのだが――。

当時は北京のタクシーは1千台あまりに過ぎず、タクシーの運転手が羽ぶりがよいなどとは絶えて耳にすることはなかった。それが現在は1万台を超過し至る所でタクシーの運転手が大稼ぎした話が伝わってくる。バス、トロリーバス合わせて運転手はやっと1万、すでにタクシーに追い抜かれてしまった。タクシー事業の発展は迅速で3千台の所有台数を誇る首都タクシーを筆頭に大小百社を数える。以前は人に羨まれたバスの運転手が今は嫉妬に燃えてタクシー運転手の後塵を拝している。職場で韓冬生と親しい仲間達はいつも誰それがこれこれの手段を講じてタクシー会社に転職していったということを話題にし、韓冬生はタクシー運転手を一番羨んでいるひとりではないが、この種のニュースはまっかな火の玉のように彼の心を灼く。不公平だと思う。タクシー会社に転職していったのは大半がコネのある者で、彼はいちいち彼等の名前と親戚関係を覚えていて熟睡中いきなり起されたとしても即座にその名前を挙げることができるほどだ。彼は仕事中時々思う。タクシーはいいよな、きれいだし気持ちがいい。冷暖房つきだしいつでも山口百恵のテープを聞くことができる。外貨券を受けとれるしタクシーを利用して他のコネを作るのにも便利だし。町なかでバスを運転していると頭の中にいろいろな雑念が浮かぶが、その中で最も抑えがたいのが「俺はどうしてタクシー運転手に転職できないのだろう」ということである。

韓冬生のような運転手の待遇はたしかに低い。市バス、トロリーバスの運転手1万余名の基本月給は平均50元。それに手当等がついて月120元前後が手取額である。衣食住は何とかなるが、誰だってもう少し余裕が欲しいではないか。たとえばカラーテレビを買うとか。

かつて人々の最重要問題は食べることだったが、現在北京市民の最大関心事はカラーテレビの購入、それも日本製を手に入れることである。韓冬生一家も例外ではない。

彼の家族は妻と一人息子、別棟に病気で行動の不自由な岳父。妻は子どもと父の世話をするため勤めをやめて家で手仕事をし、韓冬生も時間のある限り手伝い月80元ほどの収入があった。こうしてやっと洗濯機は手に入れた。喜んだのも束の間、翌日は故障しその欠陥商品を交換するのに何度も足を運ぶなど苦労した。そんなことは無論乗客達は知る由もない。

ある日帰宅すると妻が泣いている。彼らが家で内職しているのを誰かが密告したそうでもう仕事は回して貰えなくなったとか。韓冬生自身がタクシー運転手に嫉妬しているのに、他人が彼等夫婦を嫉妬するなどとは思いがけなかった。自分よりも収入の多い者を見ると嫉妬する。紅眼病。これは目下中国人に蔓延している最も普遍的心理状態である。

車掌の夏小麗は切符を買おうとした乗客をじゃけんに拒絶し、その態度を見かねた人達に非難されても反省するどころかますますふてくされて「新聞に投書したけりゃすればいいじゃないの」と怒鳴っている。

夏小麗は北京を遠く離れた郊外の高校を卒業すると北京市交通局の車掌に応募した。経済改革の速度がこんなに急激だなんて誰が知っていただろう。いわゆる個人経営が活性化し夏小麗のクラスメートで大成功した者もすでに出ている。彼は中国人の憧れの的である八種の家電製品類――

—カラーテレビを筆頭に洗濯機、電気冷蔵庫、ミシン、録音機、カメラ、バイク、ビデオ——を全部持っている。それを見聞きするにつけ彼女は早々と就職してしまったことが後悔されてならない。前もって分っていたなら個人経営の認可を受けるまで家でぶらぶらし、認可を受けたら大いに稼ぐのだったのに。夏小麗には自分だってという気がある。彼女はもともとそれほどおしゃれではないが、街には若い娘を刺激する品物や広告が溢れている。テレビにも出てくるからどんな物が流行しているかは知っている。バスに流行の服装をした女客が乗りこんでくると彼女の気持は嫉妬のため平静でいられず、たまたまその客が道順など訊ねようものならわざと意地悪くつけんどんな態度でつき放し、教えてやらない。

市バス乗務員のこのような態度に、乗客は当然腹を立て、バス会社はなぜ厳しい態度で臨まないのか、教育しても改まらない者をくびにしないのかと思う。電話や手紙での苦言や投書、正式な建議もある。

しかし1万名の運転手の3分の1は正式に転勤願いを出しており、中には離職願いを出し許可があろうとなかろうと勝手に欠勤して自分で収入の多い仕事に行ってしまう者も後を絶たない。

夏小麗もかつて退職願いを出したのに許可されなかったのも、そのうっぶんを乗客に当り散らすのである。だからくびになることなどちっとも恐れていない。数ヶ月前彼女は勝手に出てこなくなり個人経営で成功している友人の所に手伝いに行ってしまった。発見されて復職せざるを得なかったが、こうした場合もとても処分や除名どころでないのはこれ以上職員が離脱してしまうと市バスの運行に大きな支障が出てくるからである。会社は離脱行為を防止するために、夏小麗の場合のように見つけ出して連れ戻すしかない。会社に籍がある限り彼等は個人経営の認可を得ることはできないし、別の企業に正式採用されるわけにはいかない。かくして運転手は運転し車掌は切符を売らねばならないという次第。

劉心武の作品としては“5. 19長鏡頭”など同系列のもので、ある出来事をめぐって登場人物の心理、背景が細かく書かれていてある部分はどちらかというと要約しにくいのだが、話の筋としては、バスを運転するしないで揉めている最中ひとりの老人が韓冬生におだやかに「私のためにバスを出して欲しい」と頼み、韓冬生がそれを受けいれるところで終る。

この作品から見た限りでは、個人経営が認められるようになり、種々の統制もかなりゆるんで収入に差ができ、貧富の差がひろがりつつあること、にもかかわらず転職の自由はそれほどないことが、紅眼病を生み出す原因になっているようである。そのほかにいずれ取り上げるつもりであるが筆者としては教育の問題も大いにかかわっていると思う。

つぎに紹介するのは83年発表の作品なので直接紅眼病としては描かれていないのだが、農村の万元戸（億万長者といったところか）のあり方が面白いのでとりあげてみる。

## 張六指的“革命”

梁曉聲著 約2万6千字。

“萬元戸”という新しい名詞が人民日報上に出現してから、各省、市、地区、県は地域内の萬元戸を大々的に宣伝するようになった。わが兆光県の県長邢孝通は自分の行政範囲内に全然萬元戸が現われないので肩身のせまい思いでいる所に、新聞で本県土堡子公社大水塘村の農民張六指が一家5人で6頭の乳牛を飼育している記事に目をとめ、早速呼び出して話を聞くうちに、はじめは警戒して本心を明かさなかった張六指が、県長の真意を聞き及ぶに至って自分のしていることは革命なのだと言いきる。「その通り、これは革命です。どうぞ調べて下さっても結構ですが、私は互助組合から初級合作社、高級合作社、人民公社と移り変っていく間、いつだって積極分子でなかったことはありません。(中略) いつでも持てるすべてのものをつぎこんできました。共產主義じゃありませんか！大河に水が溢れていれば小川にも水がある。私は共產主義とはそういうものだと思ってますよ。なのに共產となって何10年たつのに暮らしはやっぱり貧しいじゃないですか。大河に水があるのかないのかは知らんけど、自分、張六指という小川はとっくに干からびて底が見えてる。この世に生を享け楽な暮らしを望まない者はいないでしょう。わずかな田畑を耕しているだけではいつまでたっても楽にはなれませんよ。だから私が革命を考えるのは当然でしょうが？……」(p289)そして6頭の乳牛を飼うまでにした高利の借金、時には昔の地主より高利の借金について述べ、それを聞いた県長は低利の資金が借りられるよう援助を約し「張六指よ、あんたは他の人よりも指が1本多いのだから他の人に先んじて裕福になるのは理の当然だ。この兆光県の農民の豊かさのモデルになるように」と励ます。

半年後兆光県初の“萬元戸”はこうして誕生した。県長邢孝通は大いに面目をほどこし胸を張って地区や省の委員会に出席し、張六指との会見の模様を秘書に整理の上文章化させ、県の新聞に《県長と農民のある話し合い》と題して発表し、これは省の新聞に編集者の——農村における新経済政策を実りあるものにするには、どこに着眼すればよいか(中略)農村工作の指導者兆光県長に学ぶ——云々の解説つきで記載された。

張六指の“革命”は順調に進んだが、その間に上部の政策に若干変化があり、萬元戸を作るのは資本主義を育成するのではないかとの“内部文件”があって邢孝通が動揺し、しかし“政策不変”の方も強調しなければならず、張六指のところはもう仕方ないが他の者には追従させるのは止めておこうなどと、張六指の知らない局面での動きも激しかった。

また前年にはこういうこともあった。牛乳集荷所が突然倉庫が満杯だとの口実で張六指の牛乳の引き取りを停止し彼を当惑させた。それまでにも牛乳集荷所の経営者にはずいぶんと金品を贈ってご機嫌をうかがっておいたにもかかわらず。張六指は集荷所長の下心を見抜き逆襲する。集荷所長は張六指の成功に嫉妬し、彼を困らせることによって、具体的にはカラーテレビをまき上げようと企んだのだが、長期間の闘争が行われて完敗し、逆に張六指におみやげを持参して牛乳を

入れてくれるように頼みに行く破目になってしまいます。常に彼を見下し彼からしぼり取ることばかり考えていた集荷所長をぎゃふんと言わせることができ張六指一家は凱歌をあげる。

こうして勝利の進軍を続ける張六指は次男の結婚式を盛大に挙行したあと何故か沈んでいる。全戸に招待状を出したにもかかわらず村人が式に殆ど参加しなかったからで、彼は村から自分達一家が浮き上がってしまったのを痛感し家族を呼んでいう。「わしらは村で孤立している。今日それがはっきり分かった。わしが恐れるのは、うちは確かに金持になった、だがいつか或る晩にうちが火事になったとしても、この様子ではいくら鐘や太鼓で助けを求めても誰一人として消火の手伝いには来てくれんぞ」(p312)

このあと張六指が村人のために道路を舗装したり池に柵を作ったり等の善行によって村人との乖離を埋めるのだが、それは少々張六指を無理して理想化しているように思われる。この小説の発表が83年であるところから推測して作者に万元戸をどのように見るかについてまだ若干ためらいがあったと見受けられる。更に、83年当時には紅眼病は取りざたされていなかったが、張六指の家がもし出火しても誰も消火を手伝わないとしたら、それは張六指が浮き上がってしまったというよりも明らかに村人の紅眼病のなせるわざである。

張六指には息子が二人いて、その息子達は父には従順で父の指示通り動いていたが、つぎは父を出しぬいてしまう息子達の話。

## 家政

楚良著 約7万5千字

万永恒は村の支部書記として村人を指導し家庭においては夫として父として永年威厳をもって暮らしてきた。それが農村にも請負制が導入されると長男は父の知らない間に上級機関にわたりをつけて養魚池の権利を手にしてしまう。この物語の太要は息子の養魚池経営の成功と父の勢威の減退、両者の（ユーモラスな）確執が描かれており、父の温情主義にかわり息子万高潮のドライかつ科学的な経営法が力を得ていく。運転手をしていた次男、末娘とその婚約者も販売、飼育に参加し稚魚飼育から淡水真珠の養殖まで事業は順調に発展、万永恒はすでに自分が新しい村政を担当するには不適當と書記を辞任、かわって息子の高潮が支部委員となる。永恒はみずから息子の養魚池の番人をかけて出る。

筆者が興味を感じてとり上げたのは、最後の場面で突然誰かに毒を投げこまれ稚魚が全部殺されてしまい約5千元の損害を受ける個所である。

“誰の嫉妬か、万家は誰かに恨まれているのだろうか”(p239)と皆はショックを受けるのだが、長男が徐々に察しをつけたところではそれは父の仕わざ。父万永恒としてはこのまま経営が成長し続けると、必ず周囲の嫉妬を招く恐れがあるのを見こして（それを予防するために）ひそかに稚魚を殺したのであるらしい。



げに恐ろしい紅眼病, それは現代化を阻害する大きな障害となっているし, 心ある中国人が最も嫌悪している病気である。

引 用 作 品

- |          |       |   |
|----------|-------|---|
| 陰 錯 陽 差  | 蔣 子龍  | 1985年《中篇小説選刊》獲獎作品集<br>海峽文芸出版社 1986年12月第1版 |
| 公共汽車詠嘆調  | 劉 心武  | 文芸快書(-)<br>湖南文芸出版社 1986年1月第1版             |
| 張六指的“革命” | 梁 曉声  | 1983年《北京文学》短篇小説選<br>北京十月文芸出版社 1984年12月第1版 |
| 家        | 政 楚 良 | 1984~1985《小説界》獲獎作品集<br>上海文芸出版社 1987年5月第1版 |

文中の( )は筆者